

入野遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年3月

長野県下伊那地方事務所
長野県飯田市教育委員会

入野遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年3月

長野県下伊那地方事務所
長野県飯田市教育委員会

序

西部山麓線も部分的に供用開始されており、両側には早くも、新築の住居が見立ち始めました。道路整備に伴った開発の早さには驚きを禁じ得ません。

さて、この西部山麓線も、数年後に旧市に接続の目途が立ってまいりました。工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査も、昭和60年度から始まり、当報告書で5冊めに当たります。前4冊の報告がありますが、各遺跡で古代人の住居址が発見され、現在私達が居住している場所ほとんどに、古代人の生活痕跡が残っていると想像できます。

開発と埋蔵文化財の保存とは相反する関係にあり、次善の策として発掘調査を実施し私達の先祖が残した文化の足跡が、この報告書に形をかえて永久的に保存される事になります。

この報告書から、私達が我々の遠い先祖の生活文化を還り見てみたいものだと思います。そして何かを感じ現代に生かされたら、古代文化の心が蘇ったものでありましょう。皆様のはるか古代を考える一助になれば幸いです。

平成4年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例 言

1. 本書は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業西部山麓3期地区道路建設に伴う、飯田市北方「入野遺跡」発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は長野県下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 遺跡名「入野遺跡」に、略号「INN」を与え現地作業から、整理図面・遺物等にすべてこの略号を用い記録保存した。
4. 本書は佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行い、小林が総括した。
5. 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は佐々木が行った。なお、整理作業実施にあたり、整理作業員が補佐した。
6. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、それぞれの穴の深さ（傾斜面の為、穴の壁最低部）をcmで表わしている。
7. 断面図の水平線に付した数字は、標高をmで表わしたものである。
8. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕を実線で、刃つぶし及び敲打痕を破線で表した。
9. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序	
例言	
I 経 過	
1. 調査に至るまで	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	4
II 遺跡の立地と環境	
1. 自然環境	6
2. 歴史環境	6
III 調査結果	
1. 縄文時代	
1) 住居址	
① 1号住居址	9
② 2号住居址	10
③ 3号住居址	10
2) 集石炉	
① 集石炉1	11
3) 性格不明の穴	12
4) その他	
① グリット1	13
② グリット2	15
③ グリット3	15
④ グリット4	15
⑤ グリット5	15
⑥ グリット6	16
⑦ グリット7	16
⑧ A調査区	16
⑨ B調査区	16
5) 遺構外出土遺物	
① 縄文時代	16
② 弥生時代	17

③ 石 器	17
IV ま と め	19

挿 図 目 次

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	2
挿図2 調査位置及び周辺地図	3
挿図3 調査区位置図	5
挿図4 調査遺構全体図	8
挿図5 1号住居址	9
挿図6 2号・3号住居址	11
挿図7 集石炉1	12
挿図8 B調査区・穴	13
挿図9 グリット平面・断面図	14

図 版 目 次

第1図 1・2号住居址出土土器・石器	23
第2図 集石炉1・グリット・遺構外出土土器・石器	24
第3図 遺構外出土土器・石器	25
第4図 遺構外出土土器・石器	26
第5図 2号住居址・グリット・遺構外出土石器	27

写真図版目次

図版1 調 査 前	30
図版2 1・2・3号住居址他	31
図版3 集石炉1・2号住居址炉・グリット1	32

図版 4	グリット 3・6・7	33
図版 5	1・2号住居址出土遺物	34
図版 6	2号住居址・集石炉1・グリット1・2出土遺物	35
図版 7	グリット1・2・3・4出土遺物	36
図版 8	A調査区出土遺物	37
図版 9	A調査区出土遺物	38
図版10	B調査区・遺構外出土遺物	39
図版11	調査スナップ	40

I 経 過

1. 調査に至るまで

飯田市西部の中央アルプス山麓ぎわは、果樹園が主体の農業地帯である。近年の農業経営上、車を使つての農作業が不可欠の状況となっているが、この地帯の道路は不十分なもので、南北方向に走る主要な道路は国道153号のみであり、各地区間の交通には様々な支障をきたしていた。

そこで西部の山本地区、伊賀良地区、上飯田地区等を結ぶ道路としての農道整備が計画された。

計画立案は長野県（下伊那地方事務所）、飯田市農政部局においてなされ、具体的に建設へと至った。

その結果飯田市西部の山本、伊賀良地区の活性化を目的とした農林漁業揮発油税財源身替農道整備事業の西部山麓地区の建設工事は、伊賀良地区南西端からⅠ期工事として着手された。

それにかかわる埋蔵文化財の調査は、昭和60・61年度において、飯田垣外・火振原・梅ヶ久保の3遺跡、平成元年度にⅡ期工区の細田北遺跡、2年度にⅢ期工区の大原・直刀原遺跡が行なわれた。

引き続き、平成3年度において下伊那地方事務所と飯田市教育委員会の協議を基に、発掘調査実施についての委受託契約を締結した。その契約により現地での発掘調査に着手した。

2. 調査の経過

平成3年8月3日(土)に現地へ発掘資材運搬を行い、8月5日(月)調査を開始した。

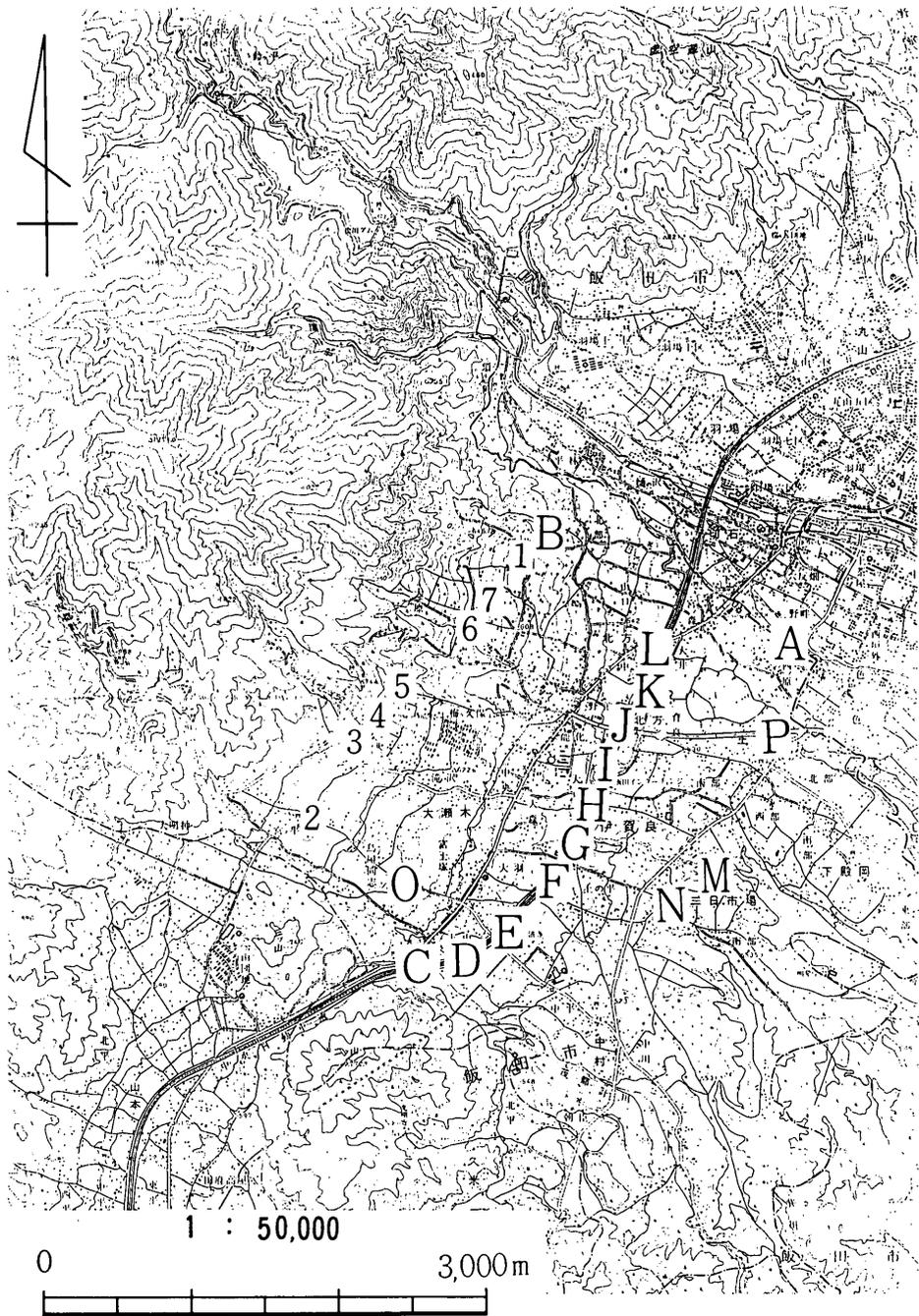
道路用地は、扇状地を切った谷の斜面中段に設計されており、現市道幅幅が半分以上で、拡幅谷底の湿地帯は除外した。

まず試掘グリット7カ所を入れ、遺構、遺物出土地点を拡張する事とし、グリット2を拡張した。

市道の付け替え部分は、入野集落の赤土採取地であり、その採取した断面に、堅穴住居址の床面と遺物を確認し、ここは全面調査とした。

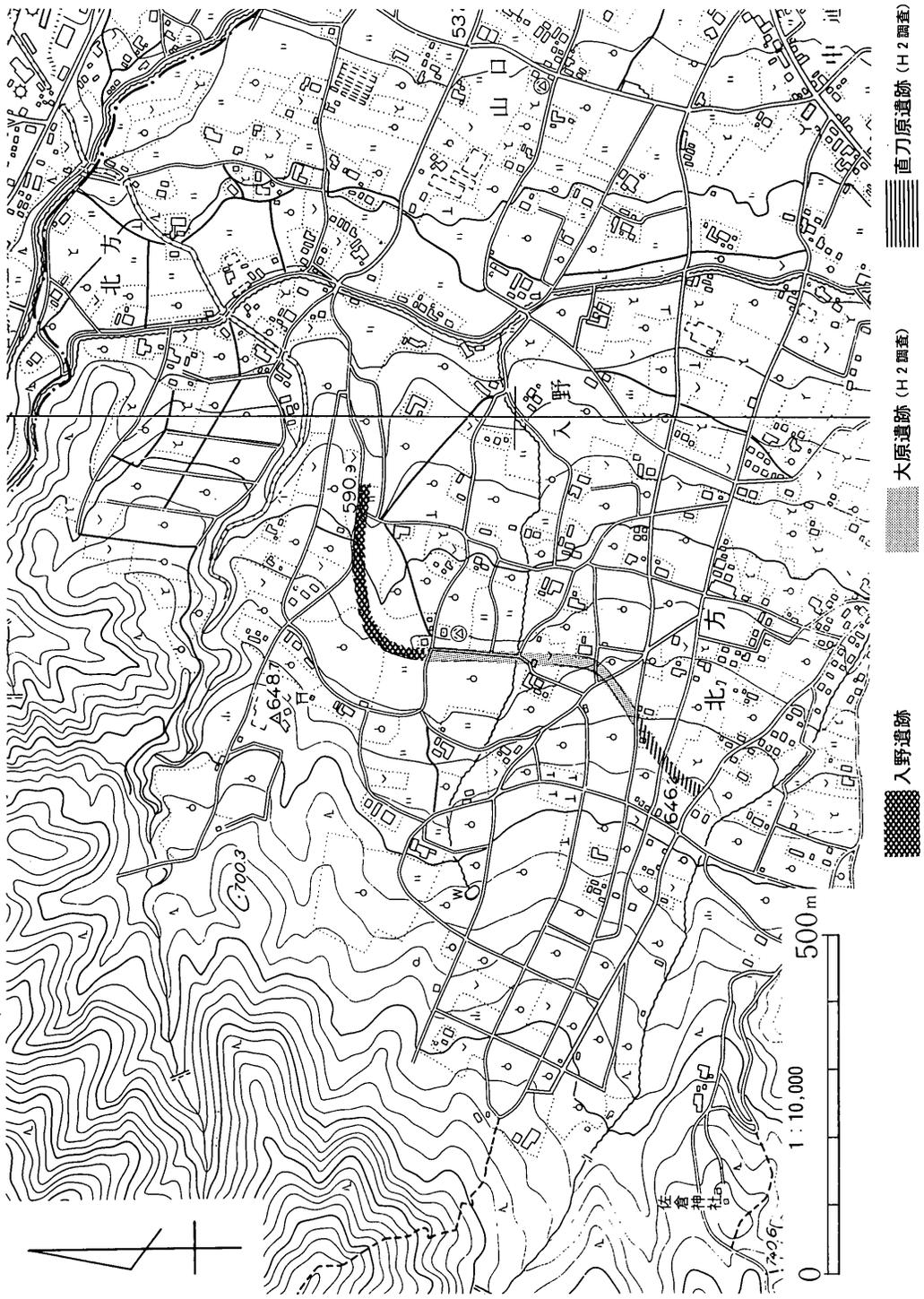
縄文時代の遺構を確認・掘下げ調査・写真撮影・実測作業を行ない、8月23日にすべての作業を終了した。

引き続き飯田市考古資料館において、現地で記録した図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記・復元作業の後、遺物の実測・写真撮影等の諸整理作業を行ない、本報告書を作成した。



- | | | | | |
|------------|---------------|----------|-----------|----------|
| 1. 入野遺跡 | 2. 飯田垣外遺跡 | 3. 火振原遺跡 | 4. 梅ヶ久保遺跡 | 5. 細田北遺跡 |
| 6. 直刀原遺跡 | 7. 大原遺跡 | A. 西の原遺跡 | B. 立野遺跡 | C. 与志原遺跡 |
| D. 上の平東部遺跡 | E. 寺山遺跡 | F. 六反田遺跡 | G. 大東遺跡 | H. 酒屋前遺跡 |
| I. 滝沢井尻遺跡 | J. 小垣外(辻垣外)遺跡 | K. 三壺淵遺跡 | L. 上の金谷遺跡 | |
| M. 中島平遺跡 | N. 宮ノ先遺跡 | O. 鳥屋平遺跡 | P. 殿原遺跡 | |

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査位置及び周辺地図

3. 調査組織

1) 調査団

調査担当者 小林 正春

調査員 佐々木嘉和・佐合 英治・吉川 豊・馬場 保之・渋谷恵美子

作業員 木下 傳・木下 当一・高橋収二郎・田中 信夫・坂下やすゑ
細田 七郎・松下 成司

整理作業員 池田 幸子・伊原 恵子・金井 照子・金子 裕子・唐沢古千代
唐沢さかえ・川上みはる・木下 早苗・木下 玲子・櫛原 勝子
小池千津子・小平不二子・小林 千枝・田中 恵子・丹波 由美
萩原 弘枝・樋本 宣子・平栗 陽子・福沢 育子・福沢 幸子
牧内喜久子・牧内とし子・牧内 八代・松本 恭子・三浦 厚子
南井 規子・宮内真理子・森 信子・森藤美和子・吉川 悦子
吉川紀美子・吉沢まつ美・若林志満子・渋谷千恵子

2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野 節 (社会教育課長)

中井 洋一 (社会教育課文化係長)

小林 正春 (社会教育課文化係)

吉川 豊 (同上)

馬場 保之 (同上)

渋谷恵美子 (同上)

篠田 恵 (同上)

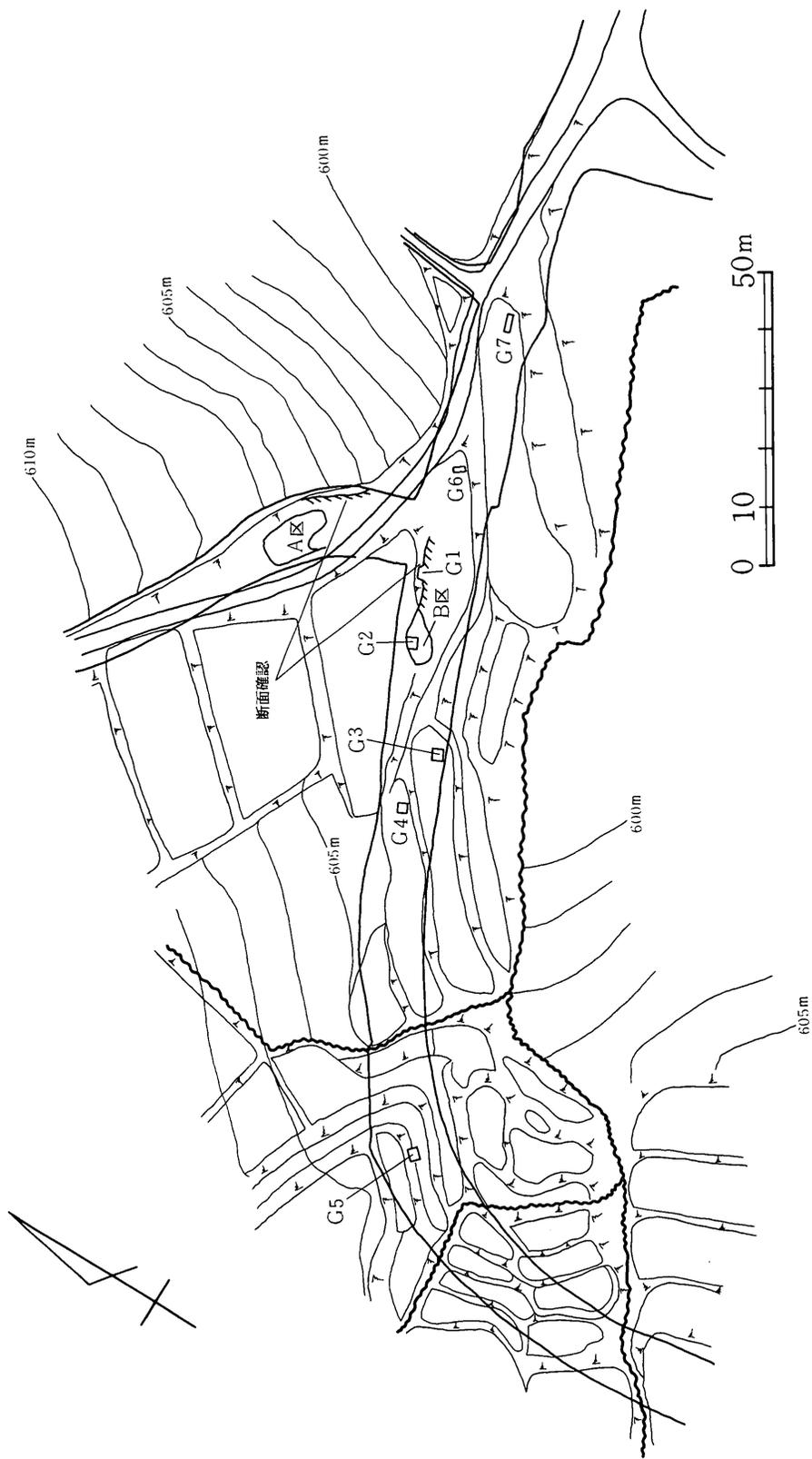


插图 3 調査区位置図

Ⅱ 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市伊賀良地区は飯田市街地の南西4～2kmに位置し、北西半分は中央アルプス南端の山麓に発達した扇状地上、東南半分は扇状地を載せている段丘上にあり、両者が連続した地形上に立地している。

入野遺跡は、飯田市北方入野に位置する遺跡である。字入野は山麓の扇状地上部の、広大な南向きの斜面にある。北側斜面の下部で字新井に続き、南西側は小さな谷を挟んで平成2年度調査の大原遺跡である。北西側は山が迫り、南東側は10m下る。調査区延長は200m余である。

調査範囲は、扇状地を開削した谷の斜面であり、階段状の水田と果樹園、赤土採取の土取場が調査対象で、保存状態は不良であった。

階段状の水田、果樹園は斜面を造成してあり、盛り土の最高は1.5mを測った。所有者の話では明治時代に、先代が造成したそうである。造成部分を剥ぐと、黒褐色土の腐植土層になり、漸移層が入ってローム層で、花崗岩の山石が混入している。

赤土採取地は、表土下のローム層を壁土にする為に掘り取った跡で、住居址2軒を確認したが状態は悪かった。

2. 歴史環境

伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地を除いてほぼ全面的に包蔵地といって良く100余遺跡を数える。調査がなされた遺跡は、当広域農道に伴う発掘調査で飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡(注1)、細田北遺跡(注2)、大原遺跡(注3)、直刀原遺跡(注4)、学術調査による西の原遺跡(注5)、立野遺跡(注6)、中央自動車道にかかる発掘調査で与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外(辻垣外)・三壺淵・上の金谷各遺跡(注7)、諸開発にともない中島平(注8)、宮ノ先(注9)、酒屋前(注10)、鳥屋平(注11)、殿原(注12)・八幡面・小垣外(注13)、下原(注14)、等の各遺跡である。

縄文時代から中世まで各期の好資料、遺構が発見され飯田下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地域といえる。

特に本農道の先線に位置する立野遺跡は戦後まもなく数度の調査がなされ(注6)、縄文時代早期押型土器の標式遺跡である。しかし遺跡は耕地整理、土取り等により消滅状態に近くなっている。

中央自動車道に伴う、各遺跡の調査では各期の住居址等の遺構が調査され、扇状地中央部付

近の遺跡状態が明確にされた。

農業構造改善事業に伴う、中島平遺跡では縄文時代早・前期、弥生時代後期、古墳時代の遺構が調査され、扇状地端の小さな舌状台地の遺跡の在り方が注目された。

伊賀良地区内の古墳は52基（注15）が数えられているが、現存するものは数基である。古墳分布は飯田松川に面する扇端部、新川兩岸の台地端部などに並ぶ。その他散在する古墳がわずかに見られる。

奈良時代に入って、古代東山道に「育良駅」の名前が見える。県内に入って「阿知駅」の次に位置する駅であるが、その所在は確認されておらず、位置については諸説があり、将来の研究課題といえる（注16）。

中世に入ると伊賀良庄の記録（注17）がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が北条時政で、江馬氏が司り北条氏滅亡後は、小笠原氏の所領となり、小笠原氏繁栄の基盤の一つとなった地区である。又当遺跡の西方約500mには、桜山城跡があり、戦国期においても何等かの意味を持った地としての位置付けもなされる。

この様に伊賀良地区を歴史的に概観したが、広大な肥沃な地であり、原始より古代そして現代まで大いに栄えた地といえることができる。

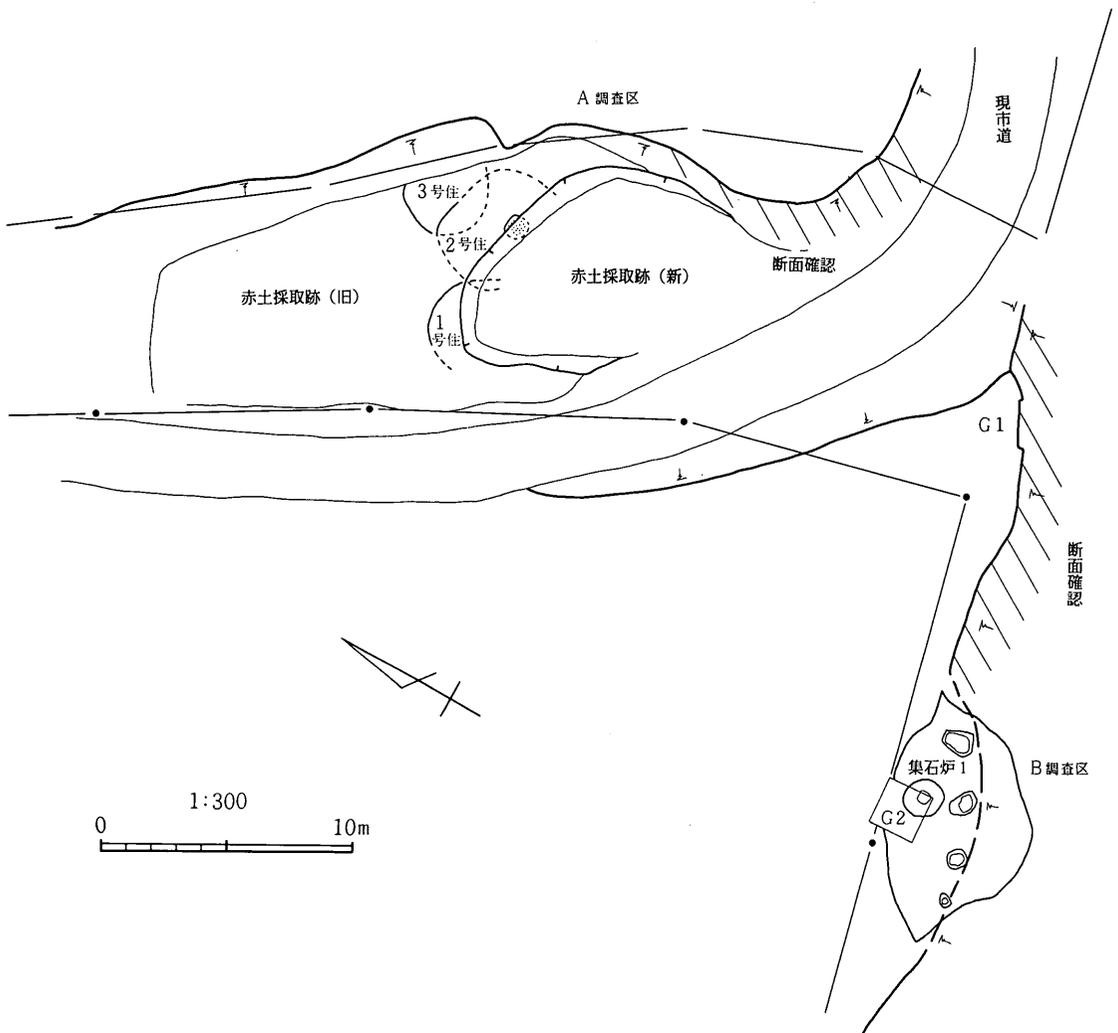
こうした歴史背景のある伊賀良地区における、入野遺跡は、それら伊賀良地区全域を見下ろす地にあり、地区内で展開された各時代の様々な人々の生活を見続けてきた場所である。

遺構の確認された縄文時代・弥生～古墳時代において、かような高所まで、居住域を求めた当時の生活や、当時の人々の旺盛な生き様が偲ばれる。

注

1. 飯田市教育委員会 1987 『飯田垣外 火振原 梅ヶ久保遺跡』
2. 飯田市教育委員会 1990 『細田北遺跡』
3. 飯田市教育委員会 1991 『大原遺跡』
4. 飯田市教育委員会 1991 『直刀原遺跡』
5. 伴信夫、宮沢恒之 1967 「長野県飯田市伊賀良西の原遺跡調査報告」『信濃』
6. 神村 透 1968・69 「立野式土器の編年の位置に付いて(1)～(7)」『信濃』
20巻10号～21巻7号
神村 透 1982 「立野式土器の編年の位置に付いて(完)」『信濃』 34巻2号
7. 岡田 正彦 1972 『中央道調査報告－飯田市内その2－』長野県教育委員会
8. 飯田市教育委員会 1977 『伊賀良中島平』
9. 飯田市教育委員会 1978 『伊賀良宮ノ先』
10. 飯田市教育委員会 1983 『酒屋前遺跡』
11. 飯田市教育委員会 1983 『鳥屋平』

12. 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』
13. 飯田市教育委員会 1988 『小垣外・八幡面遺跡』
14. 飯田市教育委員会 1989 『下原遺跡』
15. 市村 威人 1955 『下伊那史』 第2巻 下伊那史編纂委員会
16. 市村 威人 1961 『下伊那史』 第4巻 下伊那史編纂委員会
17. 宮下 操 1967 『下伊那史』 第5巻 下伊那史編纂委員会



挿図4 調査遺構全体図

Ⅲ 調査結果

調査において確認された遺構は次のとおりである。

縄文時代竪穴住居址	3軒
同 集石炉	1基
同 性格不明の穴	4基

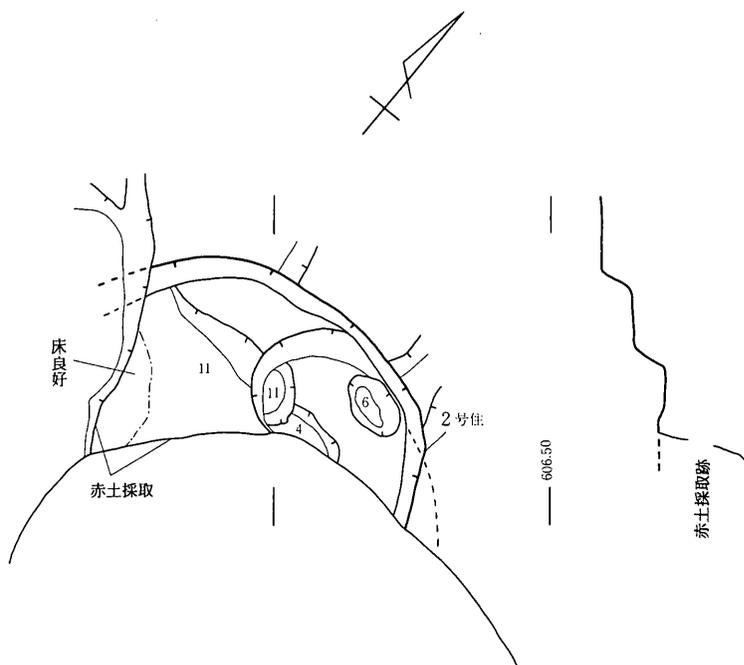
1. 縄文時代

1) 住居址

① 1号住居址（挿図5、第1図）

赤土採取で掘り取った断面に、床面・遺物を確認し1号住居址としたが、ほとんどが破壊されており調査部分はわずかである。推定直径4m前後の円形竪穴住居址である。残存部の床面まで攪乱が入っており、壁・床のわずかと、支柱穴の底部らしい穴が把握できたのみである。検出面から良好な床面まで30cm余を測るが、壁下がほぼ10cm高く、床面に段が付いていたものであろう。段面図にかかった穴が、支柱穴の1本と推定した。

遺物の出土量はわずかで、土器・石器である。第1図1は拓影で、粘



挿図5 1号住居址

土隆帯を半截竹管の連続押し引きで潰す。地文はわずかに湾曲した竹篋の並行ナデであり、他に無文の土器片が7点ある。第1図2・3は小型の横刃形石器で、2は硬砂岩、3は緑泥岩である。

時期は土器から、中期中葉である。

② 2号住居址（挿図6、第1・5図）

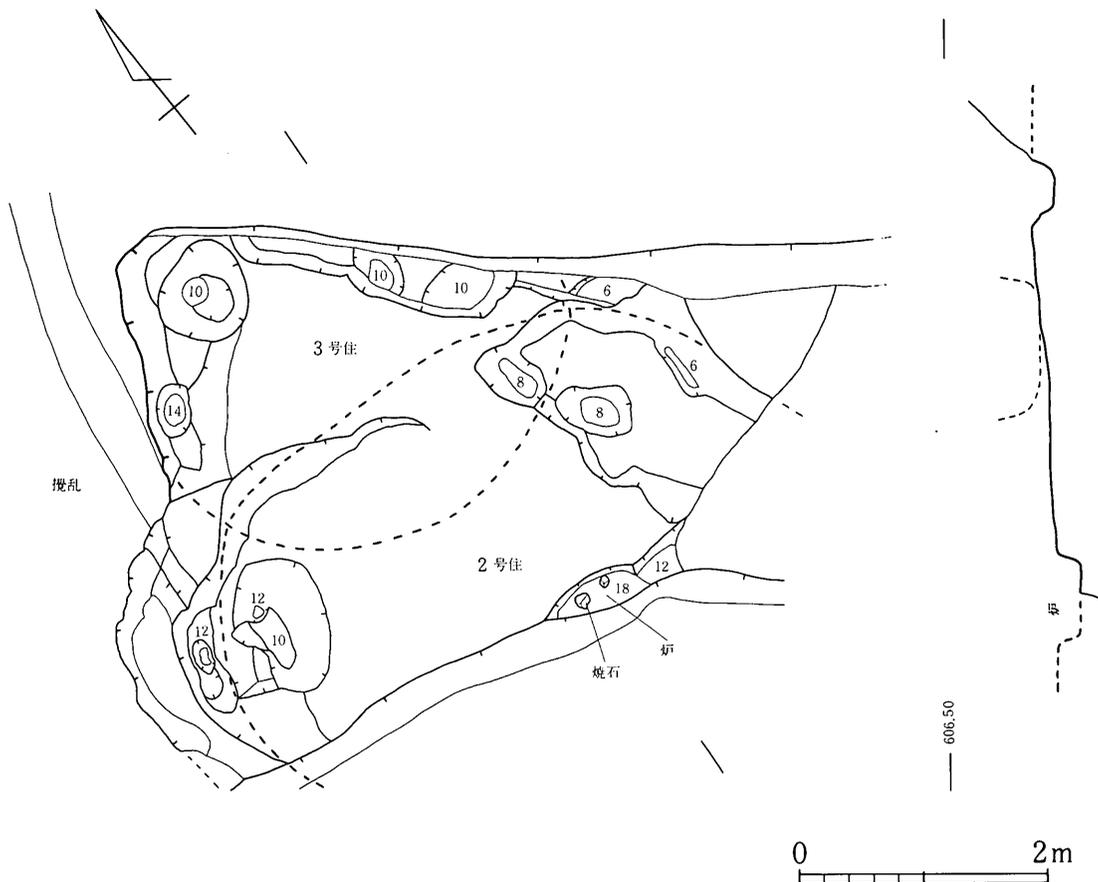
1号住居址の東側に接して、攪乱の断面に床面と炉の掘り方を確認し、3号住居址と切りあうが新旧関係は不明である。推定直径4.5mの竪穴住居址で、ほぼ $\frac{1}{3}$ 調査したが、赤土採取の攪乱が壁を破壊している。確認できた部分は、比較的良好な床面・炉の掘り方・支柱穴と推定した2カ所の穴であり、主軸方向はほぼ東と推測できる。残りの良い壁上から床面まで30cm弱で、炉の周囲がやや凹む。炉の掘り方に焼土は検出されなかったが、焼石が入っていた。支柱穴と推定した2カ所の穴は浅い。

遺物は、土器・石器であるが、土器の全体形の把握できるものはない。第1図4～6は炉の掘り方覆土中から出土し、4・5は同一個体であるが接合はせず、半截竹管による平行沈線が施される。拓影は7～21はいずれ小片で、施文も様々である。21は口頸部模様帯の一部である。他に無文土器片が18点出ている。石器第1図22～28は各種出土している。22は磨製石器の破損品を敲打器に転用したもので、塩基性岩製である。23～26は打製石斧と破損品で、器形には大小あり、完形は23だけであるが先端に使用痕が残り、すべて硬砂岩である。横刃形石器27は硬砂岩製で、自然面を残さない剥片である。敲打器28はずんぐりした形状で、使用痕が著しく残り花崗岩製である。石鏃片第5図1は先端部が残っただけであるが、玻璃質安山岩製であり、第5図2～5の剥片はすべて黒曜石である。

時期は土器から、中期中葉である。

③ 3号住居址（挿図6）

2号住居址と切り合って検出、推定直径3.5mの竪穴住居址であるが、用地境近くの為もありほぼ $\frac{1}{3}$ 調査できただけである。壁高は30cm前後で、比較的急な傾斜を持つ。床面は壁下が約15cm高いが、他の床面は赤土採取の攪乱を受けているものと思われる。支柱穴と確認できる穴は、北壁下の1本である。遺物は、入野遺跡A区で取り上げてしまい3号住居址と確実に把握できる物はないが、遺構外で載せた物に3号住居址が混入しているのは事実である。



挿図6 2号・3号住居址

2) 集石炉

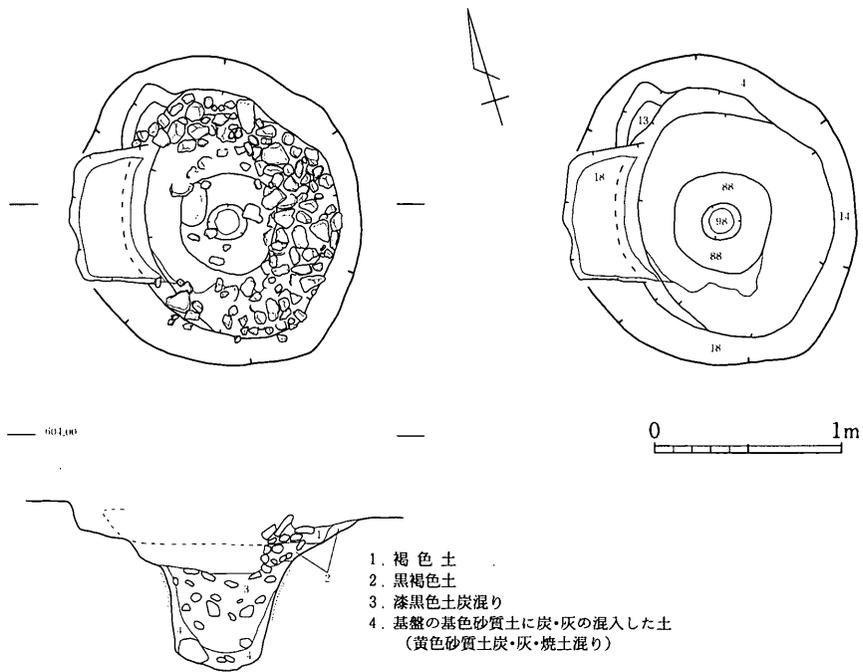
① 集石炉 (挿図7、第2図)

試掘グリット2で炭と焼石を検出、集石炉らしいので拡張(B調査区)し確認した。平面図で石の無い部分は、試掘グリットで掘り下げた部分である。掘り方直径1.5mのほぼ円形で、石の入る部分の直径は1.2m、深さは80cm余を測る。石は上部の広がった所にギッシリと入り、下層にいくにしたがって、わずかであるが密度は薄くなる。石の間は、炭・灰と黒くなった土が間隙を埋めている。底部中央はやや凹み、基盤の石が露出した。掘り

方壁が部分的に赤褐色に焼けており、石の間から焼土の検出は無く、断面形はU字形を呈し、平面に対してやや深い。

遺物は土器1点(第2図1)と、石器とした表面の滑らかなもの2点(第2図2・3)である。土器は表面の残った部分の拓影であり、剥離した部分は拓影と同じ大きさがある。拓影には沈線様の凹みがあるが、実際には確認できない。石器は表面が滑らかで、砥石と推測したものであり、2個共に砂岩の変成岩である。

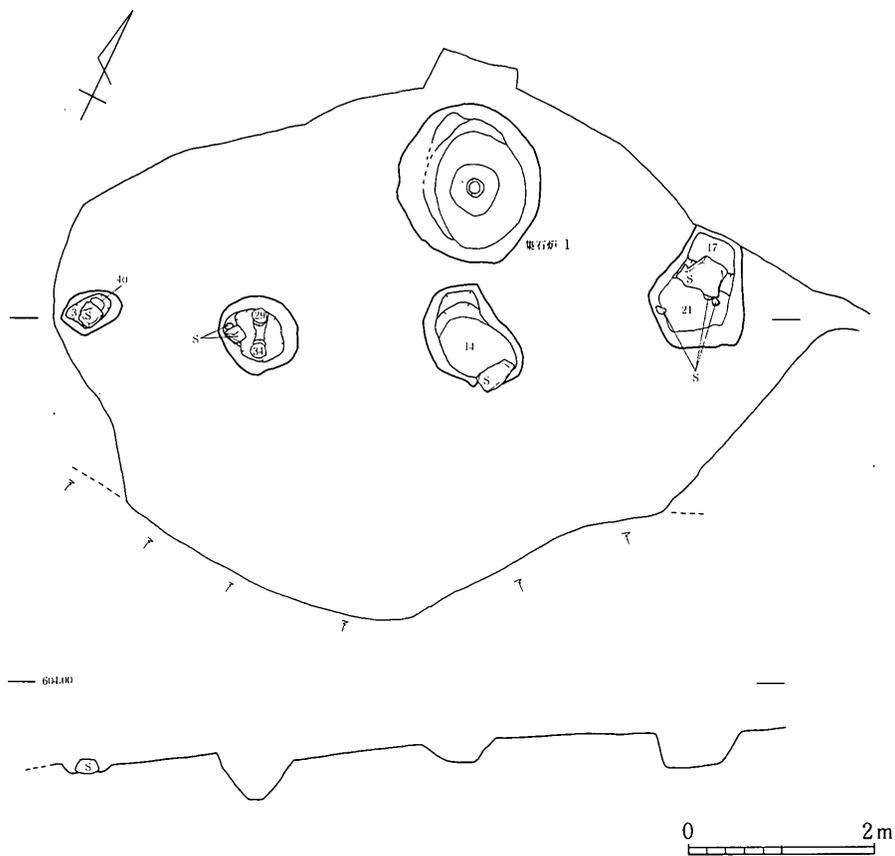
時期は、出土土器から縄文時代のいずれかに属するが詳細時期は断定できない。



挿図7 集石炉1

3) 性格不明の穴(挿図8)

集石炉周囲のB調査区で、4カ所の穴を検出した。緩い斜面に掘られ、ほぼ直線に並ぶが間隔は異なり、いずれの穴にも基盤の石が露出した。集石炉1の南側に並んでおり、何らかの関係が考えられる。縄文時代の遺構であろうが、遺物の出土は無く性格共に不明である。



挿図8 B調査区 穴

4) その他

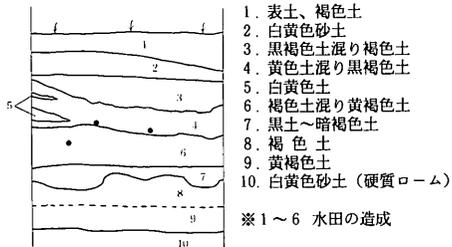
この項で試掘グリットの概要を記述する。

① グリット1 (挿図9、第2・5図)

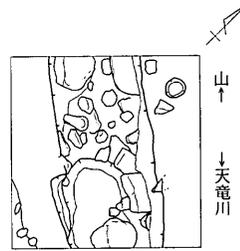
田の畦畔に、土層確認の為2m巾で入れた。畦畔崖の最高部であり、地山まで1.4mの造成埋土がある。埋土上層は地山の黄色砂土が主体で、中・下層に黒褐色土の混入した土が入っており、土器・黒曜石はこの層から出土した。この埋土は上層から下層まで、叩き締め固められている。

遺物は、掲載したものの拓影4実測1であり、他に無文土器4点があるが4cm以下である。第2図4は半截竹管による、横と斜の施文がある。第2図5～7は無文であろうが、第2

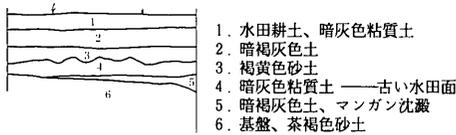
図6は磨消縄文があるかもしれない。第5図6は黒曜石の剥片である。



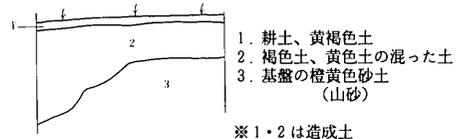
G-1 土層断面図 ●遺物出土位置



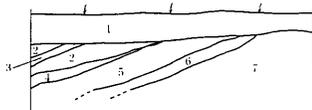
G-3 平面略図
 1. 耕土、褐灰色土
 2. 造成埋土
 3. 暗茶褐色砂土 (縄文土器片が混入)
 4. 砂



G-4 土層略図



G-5 土層略図 →山



G-7 土層略図 →山
 1. 水田耕土 (小砂利混り褐灰色土)
 2. 黄橙色砂土
 3. 褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 黄色砂土
 6. 基盤上面の腐植土
 黒土～暗褐色土
 7. 基盤
 大小石混り、黄橙色土 (砂質)

※1～5 造成で入れた土、叩いてしめてある。



G-6 土層略図 →山
 1. 水田耕土、褐灰色砂質土
 2. 小砂利混り、黄橙色土
 3. 黄色砂土
 4. 黄色土混り褐色土
 5. 暗褐色土混り黄色土
 6. 黄色土混り暗褐色土
 7. 黒土～暗褐色土
 8. 黄色砂質土 (ローム)
 ※1～6 造成土

挿図9 グリット平面・断面図

② グリット2 (挿図9、第2・5図)

集石炉にかかったので、拡張しB調査区になる。造成埋土をミニバックホーで排土し、地山上面の黒土から調査を行ない、地山は緩く南西に傾斜していた。

遺物は、グリット2調査時に出土したものですべて水田造成の埋土である。土器拓影第2図8～11はすべて無文であり、第2図12は打製石斧片、硬砂岩製である。第5図7は黒曜石の剥片である。拡張部分の出土遺物は遺構外B調査区で掲載した。

③ グリット3 (挿図9、第2・5図)

段々に造成された水田に設定し、造成埋土は耕土20～10cmとあとわずか5～1cmであった。埋土の下は地山の黄褐色砂礫土になり、自然溝址が検出された。溝址は巾1m深さ70cmで、底部に砂が堆積しており水の流れた痕跡が顕著であった。壁・底部に地山の花崗岩が露出し、覆土中にも入っていた。

遺物は、掲載したものがすべてであり、第2図13～16・第5図8は溝の覆土中から出土した。第2図13～15は縄文時代土器片で、第2図13・14には沈線文が施文され、第2図15は無文であろう。第2図16は弥生時代後期、壺の口唇部片であり、第5図8は黒曜石の剥片である。第5図17は中～近世の陶器片で、グリット調査中に造成の埋土中から出土した。

自然溝址のできた時期は、弥生時代後期以後であるが、決め手になるものが無い。

④ グリット4 (挿図9、第2図)

造成された水田に設定し、地表から地山まで80～60cmである。中間に造成埋土が入り、地山直上の覆土下層に、時期不明であるが古い水田が確認でき、畝の残りも明瞭であった。

遺物は第2図18～20の中世陶器片であり、覆土中から出土した。

第2図18の外面は露胎で、高台は貼ってあり篋削り後ナデている。内面は黒褐色の鉄釉が厚くかかっており、器種は天目茶碗である。19の外面は18と同様であるが、内面底部に露胎のわずか高い部分があり、重ね焼の溶着を防ぐ為であろう。内面の低い部分に、鬼板釉がかかっている。20は播鉢の胴部片で、内側の目が残っており内外共に鬼板釉がかかっている。

⑤ グリット5 (挿図9)

舌状台地端の、急斜面を造成して、巾の狭い(4～2m)果樹の段々畑にしてあり、果樹の間に設定した。地山の橙黄色砂質土の上は、すべて造成埋土で1～0.5mを測る。造成埋土には現代の塵芥穴があり、陶磁器片が入っていた。他の遺物の出土はなかった。

⑥ グリット6 (挿図9)

扇状地を切った、小河川の急な斜面を造成し巾の比較的狭い水田に2×1mのグリットを設定した。地山の黄色砂質土の上は、すべて造成埋土で1.1~0.5mを測る。造成埋土は幾層にもなっており、傾斜が強くなると著しい。遺物の出土はなかった。

⑦ グリット7 (挿図9)

グリット6と同様の水田に3×1mで設定した。地山の大小石混りの黄褐色砂質土の上は、すべて造成埋土で、地山を削平した所もグリット端部に出土した。埋土は、水田面から80cmの調査で止めたので、地山傾斜はグリット $\frac{2}{3}$ が明確になっただけである。遺物の出土はなかった。

⑧ A調査区

A調査区は、入野地区民共有の赤土採取地で、住居址の確認できた部分以外はすべて攪乱である。赤土採取の底部まで調査し、採取時に表土など不用な土を、穴に埋めもどした状態が看取できた。

⑨ B調査区

2) 集石炉 ① 集石炉1、4) その他 ② グリット2 参照

5) 遺構外出土遺物 (第2・3・4・5図)

遺構外出土遺物は、比較的多量に出土しており、土器はA・B調査区共に縄文時代から弥生時代のもので出土している。石器も多いが、時期確定はできない。遺物の出土は、攪乱と水田造成の埋土であり、A調査区はすべて攪乱で、天竜川の割砕石や磁器片・缶詰の空缶等が混入していた。土器は時代毎、石器はまとめて概観する。

① 縄文時代

A調査区出土の第2図21・22は、深鉢口唇部小片で全体形は推測できない。21の施文は、半截竹管の背面による。左からの押し引きが2条残っている。22の施文は、半截竹管の腹面による縦横の沈線であり、平出Ⅲ類Aの形式である。

第2図-23・24は、浅鉢口唇部片であり、全体形はほぼ推測可能である。23の外表面は、細い竹か稲科の茎による沈線が、右から左に施文される。口唇部には半截竹管の背面による、2条の押し引きがあり、内側から見て左から右に施文される。24は破片がやや大きく無文で、胎土には3~0.5mmの小石粒が非常に多く混入する。

第2図25~36・第3図1~16は、いずれも深鉢片で細い竹か稲科の、束による沈線を施

される。17は前述の施文を持つ、底部片であり直径6.5cmで、胴部にかけてやや広がっている。内部調整は、横なでである。以上の時期はほとんどが、中期中葉である。

第3図18は小片であるが、粘土紐を貼り付け、上・側面に竹管による押圧を施し、時期は中期中葉である。

第3図19～24は地文で縄文を施されるが、様々なタイプがあり中期全般に使用されており、時期の特定はできない。

第3図25～27はA調査区の、北東側に隣接する野菜畑で表採したものである。3点共に器壁の胎土・色調・施文が似ており、同一個体であろう。施文は半截竹管による、平行沈線を矢羽根状に施しており、一部交差した所もある。時期は中期中葉で、平出Ⅲ類Aの一部であろう。

第3図28～31は中期後葉の特徴である、楕形状のモチーフを持っている。28・29は半円形に下垂する、粘土隆帯も厚く沈線もしっかりしている。

第3図32は小片で時期不明であるが、下垂する2本の隆帯が終息する位置である。小石粒3～0.5mmが、やや多く混入し粘土は細かく、色調は淡赤褐色を呈する。

B調査区出土の、縄文時代土器片はわずかである。第4図10は浅鉢の口頸片で、唇部を欠くが器形の推測は可能である。外面は摩滅しており明確ではないが、施文があった様子である。内面は、唇部が厚く胴部が薄くなっており、輪花の外側に粘土が盛られた様になっている。

11は細い竹管か稲科の束による、沈線部であり中期後葉であろう。

第4図12～16はごく小片で、時期は明確に把握できないが、特徴を記す。12は沈線を横に引き、半截竹管の腹面で沈線に直交する様に、上下に平行沈線を施す。13は中央横の、隆帯上下に半截竹管背面による押引文を施す。14は斜めの縄文を施す。15の外面は、摩滅が著しく拓本では縄文が見えるが、内面は器面が残る。16は無文であり、内面に剥離があるが厚く、底部かもしれない。

② 弥生時代

弥生時代土器片は、A・B調査区から1個ずつ出土している。第4図18はA調査区から出土し、甕の底部で木葉痕が残る。外面には2次焼成痕があり、内面は横なでである。第4図19はごく小片であるが、器面・胎土から弥生時代の甕と推定した土器である。上部に斜走短線文か、波状文がわずか残っている。

③ 石器

石器は打製石斧・横刃形石器・砥石等出土しており、A調査区は第3図33～36・第4図1～9、B調査区は第4図17である。33～36は打製石斧の完型品であり、35を除いて使用

痕が著しく残る。33・35は硬砂岩、34は緑泥岩、36は青灰色硅岩である。1～4は打製石斧の欠損品であり、4の右側は節理で破損している。2・3は打製石斧の刃部で、4は胴部から端が残っている。3は使用痕が残っており、これのみ塩基性岩で、灰黒色を呈しており、他は硬砂岩製である。5は横刃形石器の完型品で、1次剥離の剥片に刃部を調整しており、泥岩の変成品で淡緑灰色を呈している。6は転石を利用した、砥石の半欠品で使用痕が残っており、砂岩製である。7の石器は、性格が把握できず、石核としたもので、全面剥離されており硬砂岩である。8も性格不明の石器であり、周囲全周に2次剥離をされており、硬砂岩である。9は円形の転石で、性格不明の塩基性岩である。17はB調査区から出土し、打製石斧の半欠品である。残部から、大型品と推測でき、敲打痕が残っており、緑泥岩製である。

黒曜石・硅岩製などの小石器であるが、A調査区17点（第5図9～25）・B調査区1点（第5図26）出土している。9・10は打製石鏃の完型品であり、前者は身の厚い有茎鏃である。後者は三角鏃で、基部は表裏共に自然面ないし、1次剥離で直線的になっており、身は薄い。11～25は、19の玻璃質安山岩剥片を除いて、すべて黒曜石である。器形には大小があり、一部使用痕の残るものは、12・13・21・22である。しかし石器の一部と、推測されるものは無い。26はB調査区から出土し、実測平面図のほとんどが自然面であり、裏面は1次剥離である。

IV ま と め

今回発掘調査が実施された地区は、中央アルプス南部の笠松山麓から発達する舌状台地の、南向斜面である。南西は小河川の谷を狭んで、平成2年7月調査を行なった大原遺跡である。道路は大原の集落をほぼ北東に横切り、小河川の谷を渡った所で東に向きを変え、入野遺跡の南向斜面を下る。斜面を新設と拡幅で標高を下げ、舌状台地端近くで北に向きを変え、台地を横切る。台地端は、県下にも有名な縄文時代早期標式遺跡の立野遺跡である。斜面は段々に造成を受け、上部から果樹園・水田であり、途中市道が分れ、入野集落の赤土採取共通地を通る。水田が終ると市道の拡幅で今年度分は終る。A調査区は赤土採取場で、2段になり上・下段中間の壁に住居址断面を確認した。B調査区はグリット2を拡張した部分で、造成埋土の下である。調査で確認した遺構について、舌状台地端部という地形も考慮して、調査区・グリット毎に整理しまとめとする。

A調査区の微地形は、共有の赤土採取地の為2～1m下がっていると思われるが、舌状台地端で南向の緩い傾斜の始まる所である。縄文時代の住居址を3軒確認したが、赤土採取が無かったら、多数の住居址が検出された可能性が強い。赤土採取地の下面は、凹凸が著しくそこに不要の表土を埋めもどしており、遺物はそこから出土した。用地のすぐ北側の隣地は、ひどく荒れておらず表面採集もでき、元の状態を残すと推定できる。

縄文時代中期から、弥生時代後期の遺物があり、周辺部における同様の状況から推測して住居址の立地条件が整っているので、この間の遺構の存在は間違いのないといえる。又用地外も舌状台地南側端部で、条件が良いのでかなり規模の大きな遺跡であり、周辺の中核的な集落址の存在が予想される。

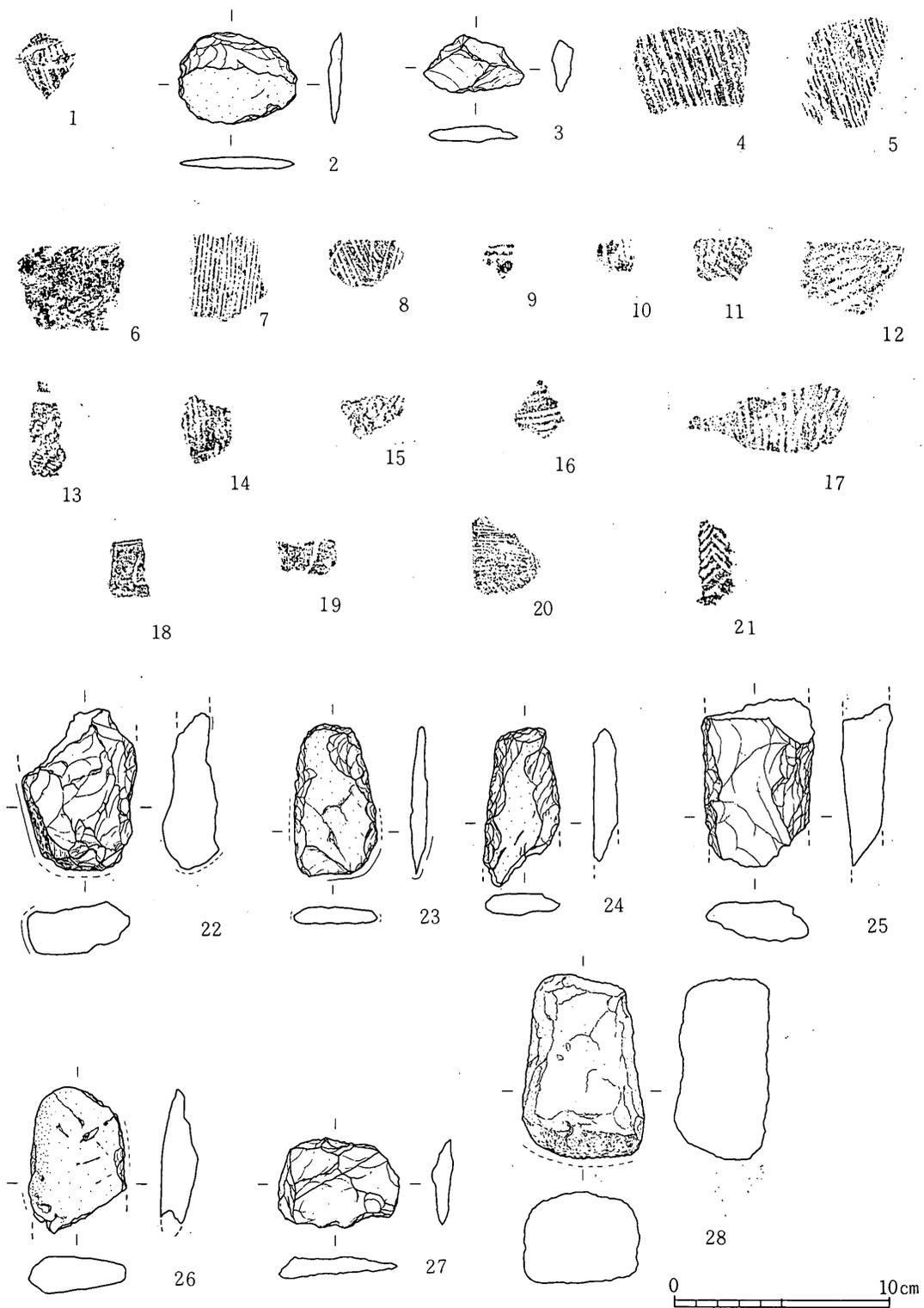
B調査区は、南向斜面で集石炉と穴を確認したが、この部分の傾斜は緩く西～北～東側には、住居址の存在も推定される。斜面の為ローム層の堆積は少なく、30～20cmで礫の混る伊那層になり、穴の壁・底に礫が露出した。B調査区の南側は、すぐに斜面が急になり約20～15m下がって、底部の小川になる。遺物はごく少量で、地山のローム層の褐色土からであり、縄文時代と弥生時代の土器片が出土しているが流入したものと判断される。

グリット1・2は造成土が、非常に厚く地山の上1.6m前後ある。遺物は、この造成土中から出土した。グリット2の地山に、炭と焼け石を検出したが、調査地の劣悪な条件のため集石炉の把握が遅れ、上層部分の記録に若干不備な点も生じた。

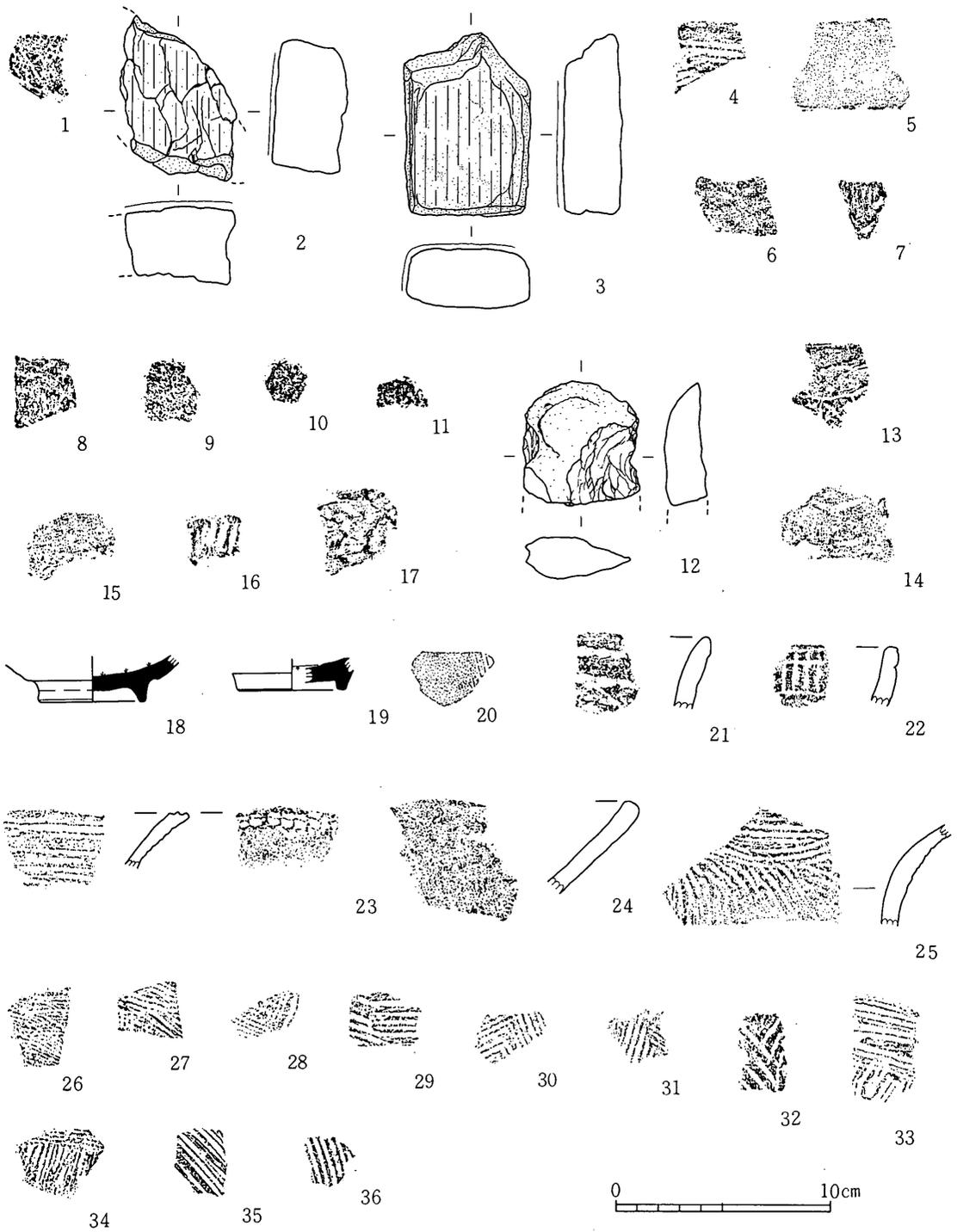
グリット3～7は、水田と果樹園に入れ、地山からの造成土が薄い。グリット3のみ、時期不明の溝址を検出したが、他は地山のみであった。すべての造成土に共通であるが、耕土の下から最下層まで良く叩き締められており、造成した水田が崩落しない為の、先人の知恵であろう。

以上、今回の調査結果から、調査区・グリット別に若干のまとめをしたが、舌状台地の南側端部と斜面であり、古代集落の広がりを確認するまでには至らなかったが、遺跡の位置付けができた事は、今後地域の古代の姿を検討する上で、大きな役割を果すものといえる。

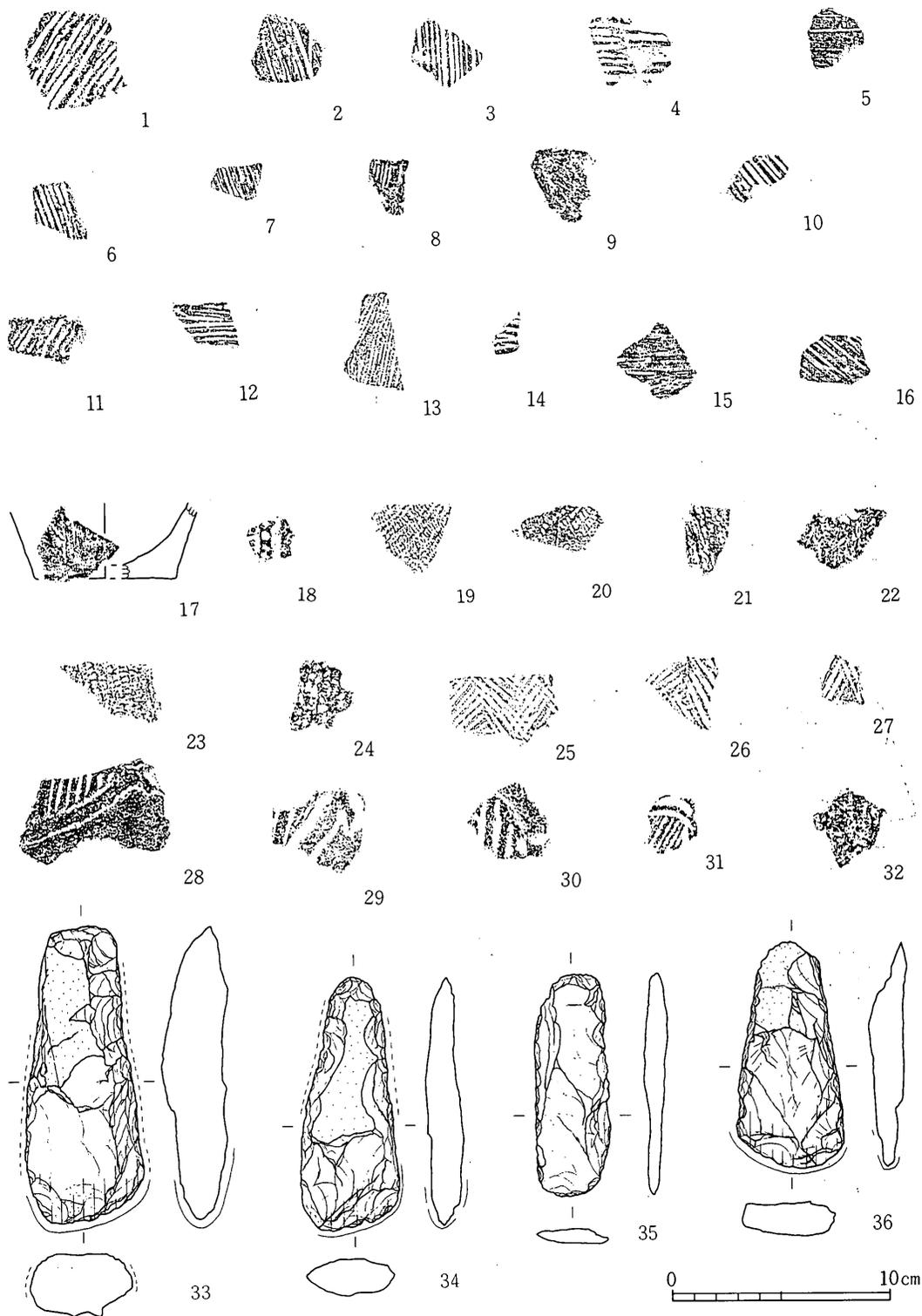
圖 版



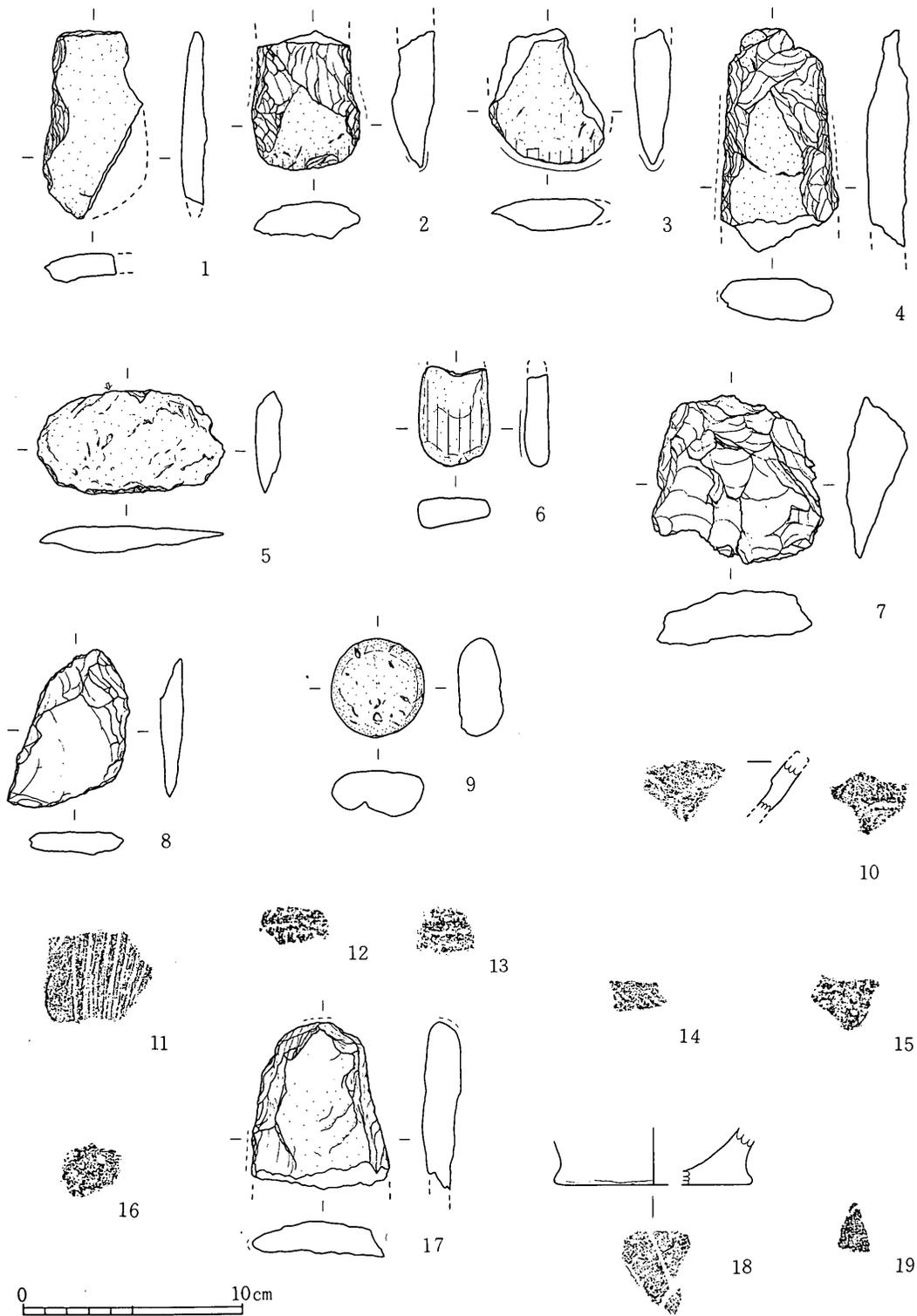
第1图 1号住居址(1~3)·2号住居址(4~28)出土土器·石器



第2図 集石炉 1 (1~3)・グリット 1 (4~7)・グリット 2 (8~12)・グリット 3 (13~17)
 グリット 4 (18~20)・遺構外 (A調査区21~36)出土土器・石器



第3図 遺構外(A調査区1~36)出土土器・石器



第4図 遺構外 (A調査区1~9) (B調査区10~17) (弥生時代A調査区18、B調査区19) 出土土器・石器



第5図 2号住居址(1~5)グリット(6)・グリット2(7)・グリット3(8)
遺構外(A調査区9~25、B調査区26)出土土器

写真図版

図版 1

A 調査区



B 調査区



1号住居址
確認



調 査 前

1号住居址と
赤土採取跡
南から



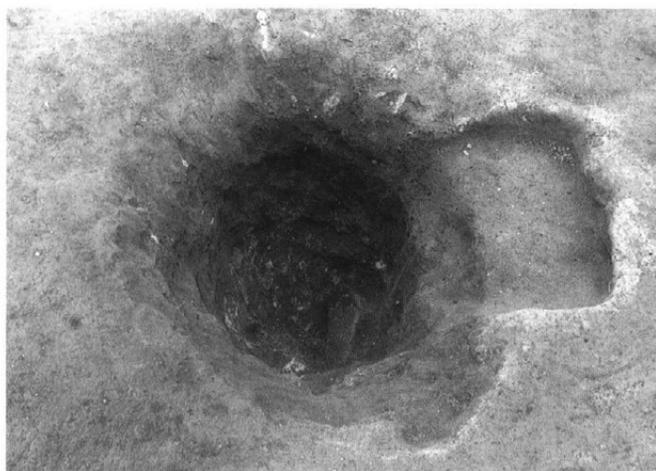
2・3号住居址



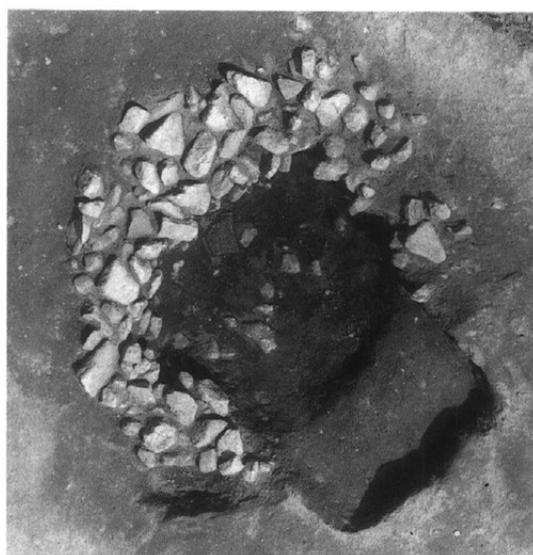
赤土採取跡
北から



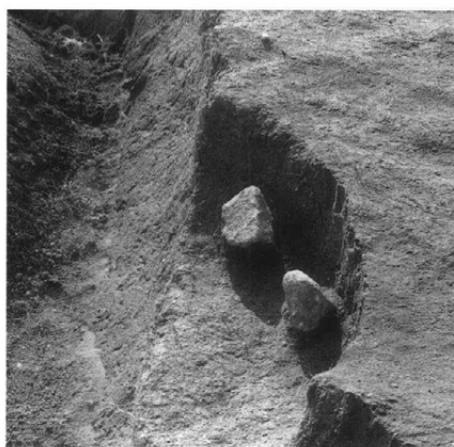
集石炉 1 平面



集石炉 1 石の状態

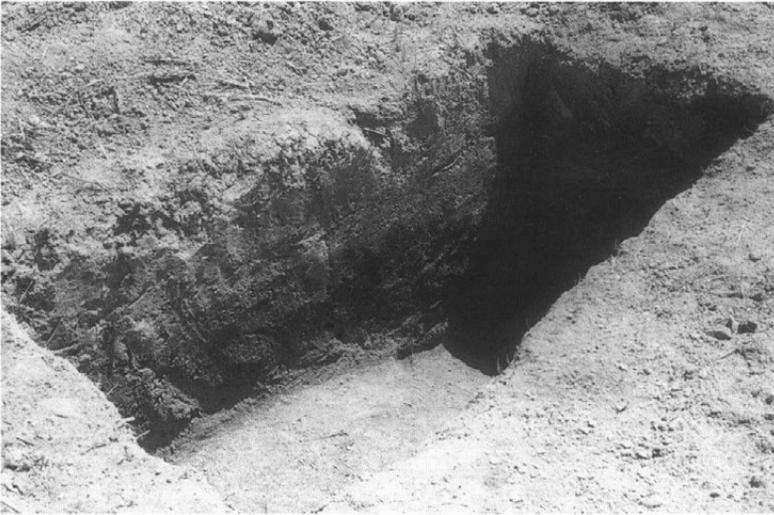


2号住居址炉



グリット1 土層

グリット3
平面

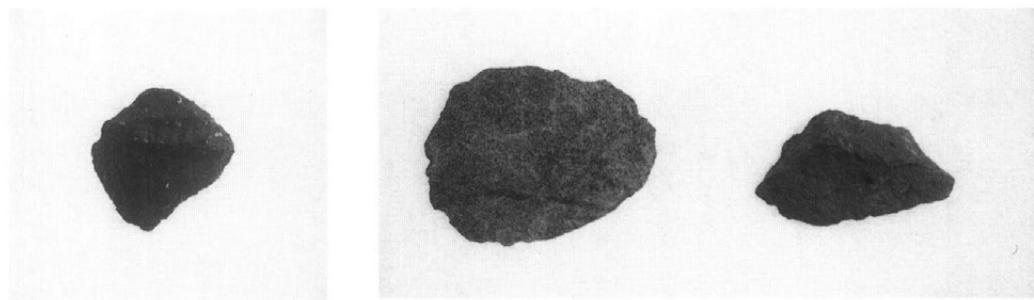


グリット6
土層

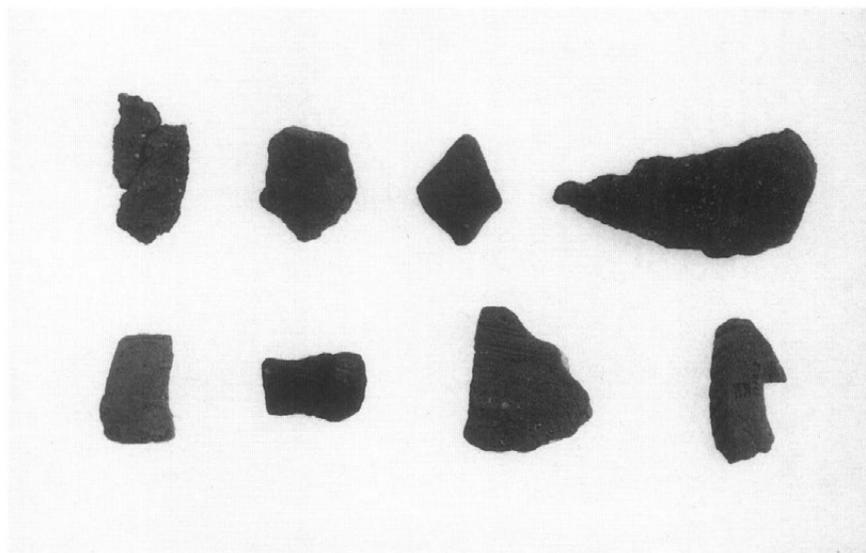
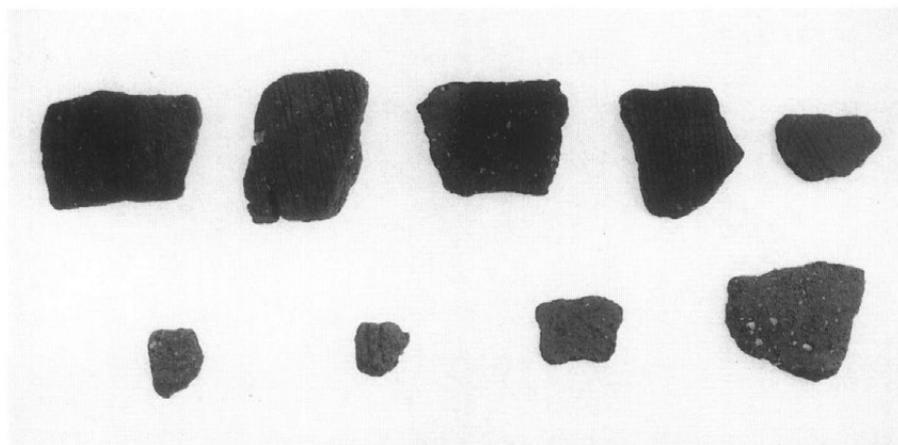


グリット7
土層

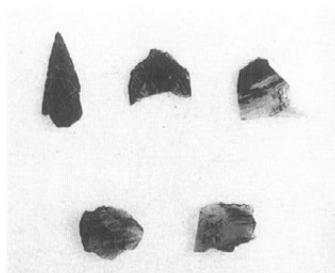
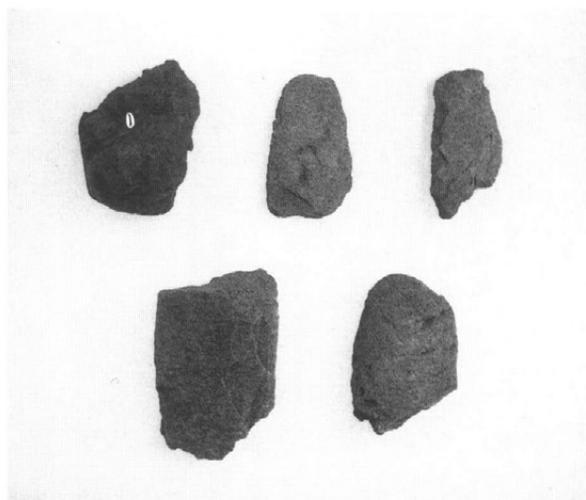
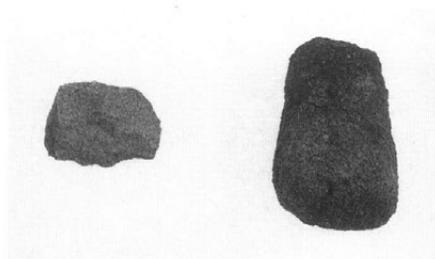
图版 5



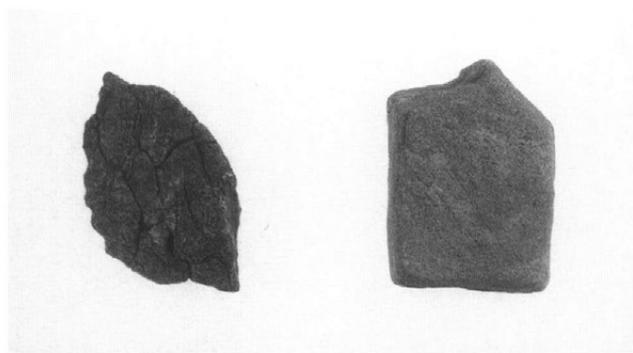
1号住居址出土、土器・石器



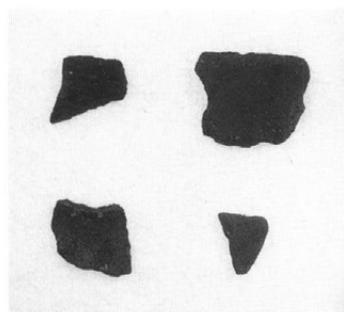
2号住居址出土、土器



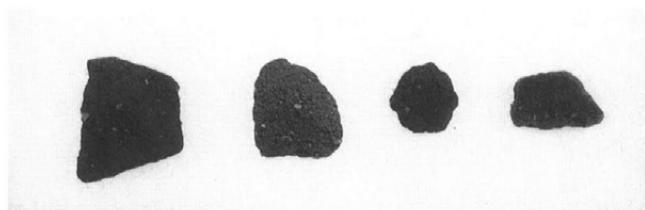
2号住居址出土、石器



集石炉1出土、土器・石器

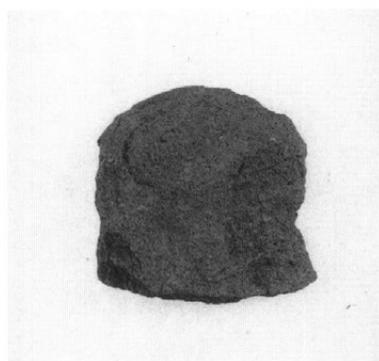


グリット1出土、土器

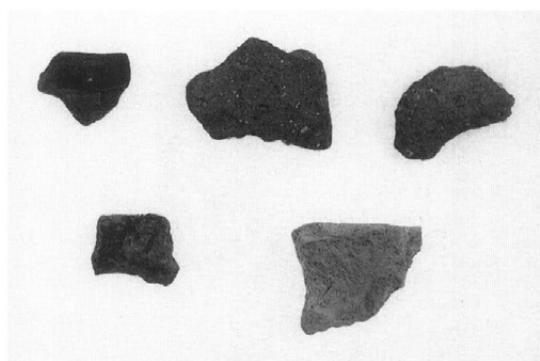


グリット2出土、土器

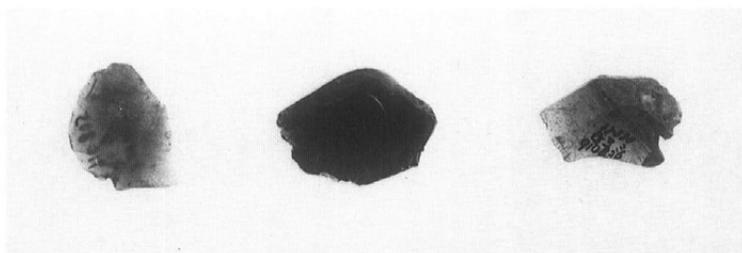
図版 7



グリット 2 出土、石器

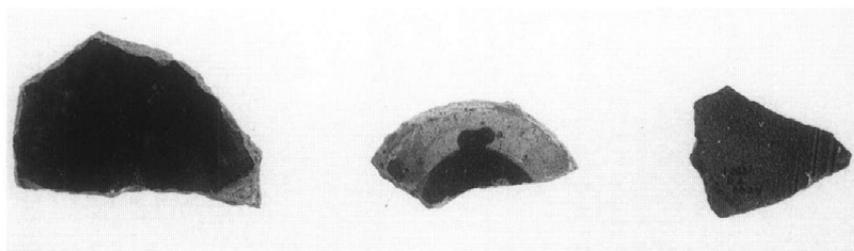


グリット 3 出土、土器

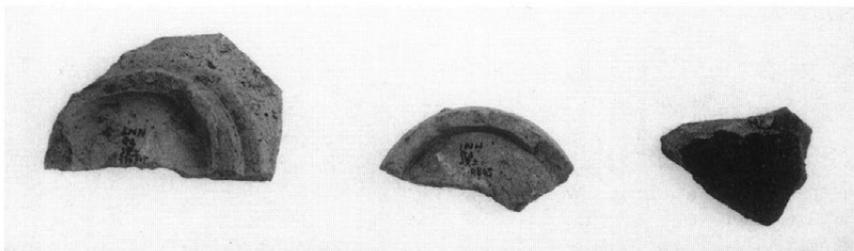


グリット 1・2・3 出土、石器

内
面

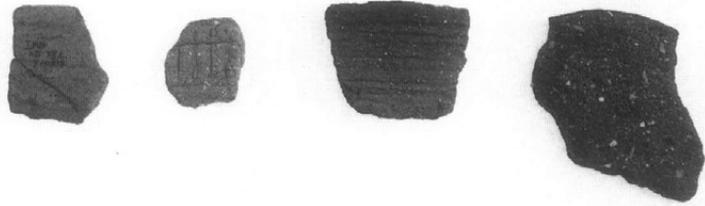


底
面

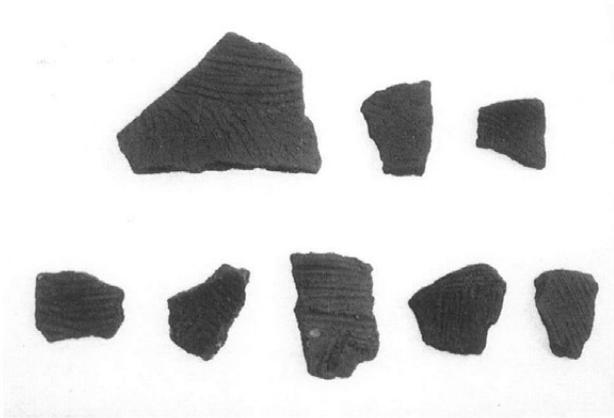


グリット 4 出土、中世陶器

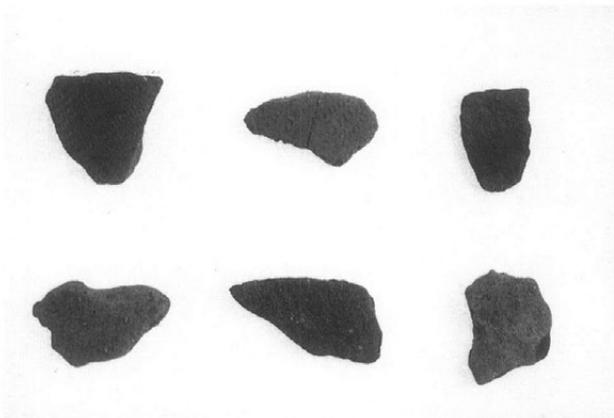
口
縁
部



胴
部



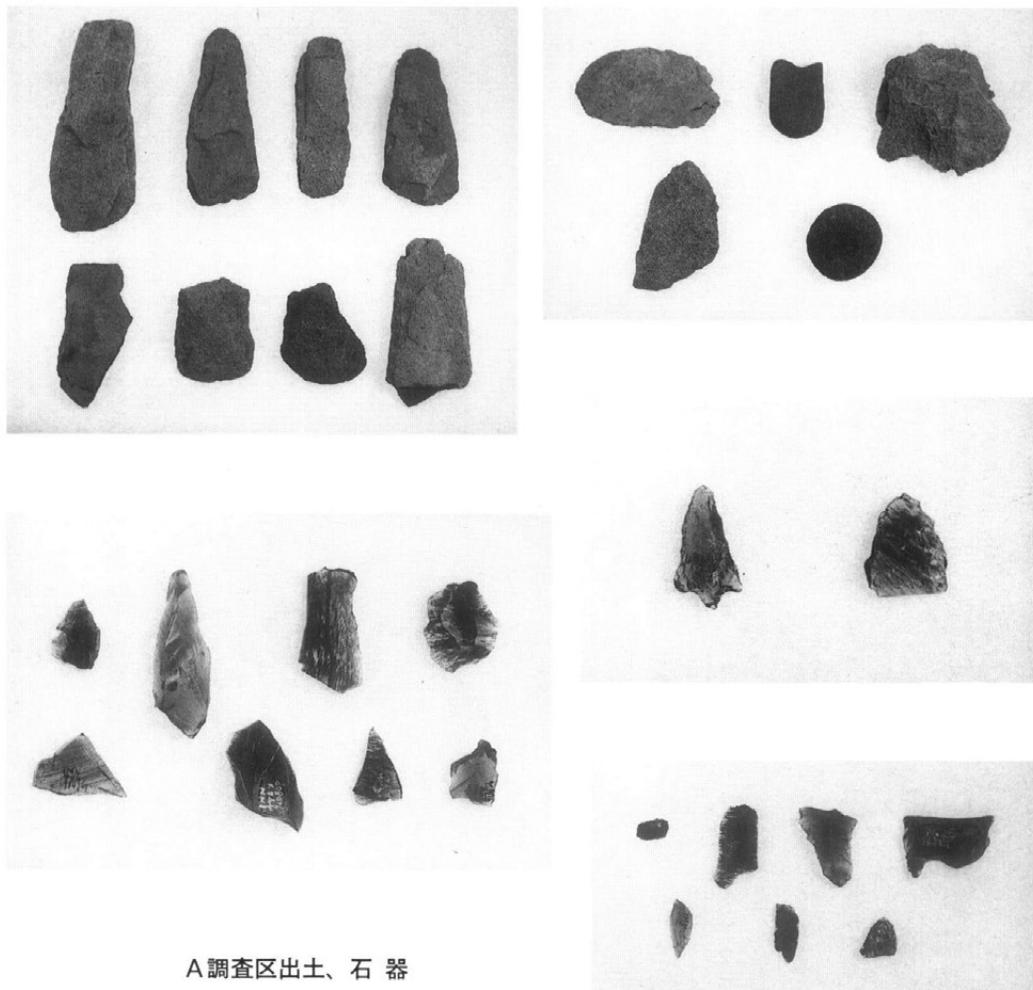
後
胴
部



繩
文
部
部
部
底
部

A調査区出土、縄文時代土器

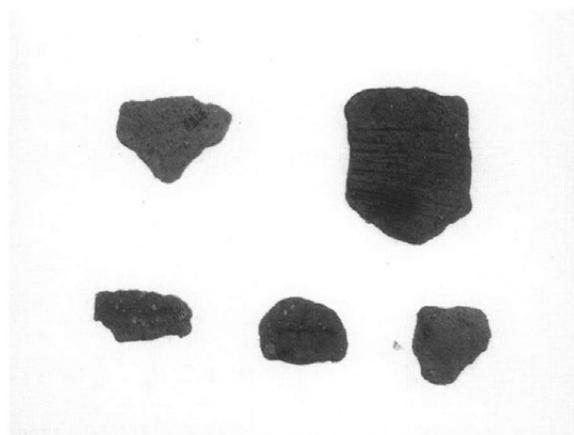
图版 9



A調査区出土、石器



A調査区北東側 表 採



B調査区出土、土器・石器



A調査区出土



B調査区出土

弥生時代土器



A 調査区



B 調査区



グリット1



グリット2



グリット5



斜面で住居址確認中

調査スナップ

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業(西部山麓地区)
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

入野遺跡

1992年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印 刷 長野県下伊那郡上郷町黒田786番地
杉本印刷有限公司

